

井上円了と朝鮮巡講、その歴史的位置について

許智香

（一九二九）の例を取り上げる。

これまで日本思想史分野における「哲学」という用語の翻訳およびその学問の受容問題は、おむね一国史に限定された形で議論されてきたといえる。しかし、中国や韓国の場合、二〇世紀に入つてから日本を経由して「哲学」を受け入れたことを考えると、西洋哲学の受容および定着という問題は、一九世紀末から二〇世紀初頭における帝国主義と植民地拡張の歴史の中から考察されるべきであろう。^①このような点から本稿では、明治期において「哲学」の受容および定着に積極的に関わっていた井上円了（一八五八

開した点などからわかるように、「官学アカデミー」としての「哲学」と国家との関係にもつとも敏感に対応していた知識人であった。⁽⁴⁾さらに、かれは日露戦争以後、東洋大学の館主として朝鮮および満州において講演活動を行い、「哲学思想の幼稚なりし日本に哲学思想の普及に尽瘁」した「井上博士」として名を知られていた。このようなことから、本稿では「國家」による学問の制度化の外側に存在しつつも、というより、そうであつたからこそ二つの意味での「拡張」事業に情熱的に関わっていた井上円了に注目する。ここで二つの意味としての「拡張」というのは、かれの「哲学堂」と、帝国日本の植民地主義を指示示す。

また、明治思想史に関する先行研究が、実証主義を先頭とする「文明開化」と「在来思想」とを対抗的論理軸として想定し、その上で井上円了を論じてきしたことにも注意を払わなければならない。ここには井上が僧侶であった点がその理由として大きく作用しており、かれの思想がおおむね西洋思想の受容に対する仏教側の動向として紹介されてきたのが、その原因の一つであろう。その中でも、たとえば井上哲次郎は、井上円了に対して「従来の伝統的思想」である「仏教」の「理想主義的傾向」を「哲学」と結合させた人物として位置づけている。⁽⁵⁾また、進化論やエネルギー論などの西洋哲学を媒介に仏教を再構築したという評価や、キリスト教の勢力に対して仏教の優位性を思想的に証明した「仏教のイデオローグ」という評価、そして「日本型観念論」の第一世代という指摘もそのような対抗的論理を背景にしている。⁽⁶⁾しかし、それと同時に、井上円了が「哲学」を形象化し、それに「普遍的な学問」という地位を与えたことと、かれにおける国家主義的活動が矛盾するものではなく、むしろ相通じていることは、井上自身の言葉からも確認できる。⁽⁹⁾他の研究者たちによつても言及されたことがある。⁽¹⁰⁾

井上円了におけるかような「哲学」と「国家主義」、そして「植民地主義」の問題を問うため、本稿ではかれの「朝鮮巡講」を取り上げたい。「朝鮮巡講」は、いわば、当時「哲学者」と呼ばれていた「内地」知識人の植民地における活動の一例であり、帝国と植民地の問題に関する「哲学者」の言説を窺う契機にもなるはずである。

二、「哲学館」の設立およびその拡張過程における全国巡講

井上円了が最後の全国巡講を始めたのは⁽¹¹⁾、一九〇六年のことであった。⁽¹²⁾そのなかで朝鮮に向かったのは一九一八年のことであったが⁽¹³⁾、翌年、井上は中国の大連で倒れるため、この朝鮮訪問はかれの晩年に当たるものとなつた。以下で

は、晩年における巡講活動を本格的に検討する前に、まず全国巡講の思想的背景と現実的な目的を窺い知るために、一八八七年に遡つて井上のいくつかの具体的活動をみるとする。

井上円了は一八八四年に東京大学哲学科の卒業生を中心創立した「哲学会」の『哲学会雑誌』において、次のような文章を書いている。

哲学者。所以論究思想之原則事物之原理之學也。是故思想所及。事物所存哲学莫不関焉。定心理之原則者。是為心理哲学。定論理之原則者。是為論理哲学。論政法之原則者。謂之政法哲学。論社会之原則者。謂之社会哲学。論道德之原則者。則倫理哲学也。論美術之原理事者。則審美哲学也。論宗教之原則者。則宗教哲学也。……特有所論究原理之原則之大宗學。名之曰純正哲学也……

この文章において井上円了は、哲学を「思想の原則」「事物の原理」に論及する学問として定義づける。このような定義によつて「心理」の「原則」は「心理哲学」となり、「論理」の「原則」は「論理哲学」となる。井上はこのように定義した哲学を「文明の發達」をなす道具として主張した後¹⁵、その理念を「哲学館」設立を通じて具現化していくことになる。

哲学館は、一八八七年六月の開館式において井上が明らかにしているように、文明をなすための「高等の學問」である哲学を教育し、他の學問領域に原理原則を与える目的を有するものであつたが¹⁶、その裏面にはより現実的な目的と課題があつた。その一つは、かれ自身が僧侶だったことに関連する。當時、東京に留学していた東本願寺からの留学生を代表して井上が教団側に送つた手紙には「僧侶ノ教祖ニ對シ本山ニ答フルノ義務、布教伝道ノ目的ヲ達スルニ外ナラス」とあり、仏教の布教のためには「西洋諸説ヲ論究シテ、其眞理ト比考スル」必要があると書かれている¹⁷。実際に、一八八七年に刊行した『佛教活論序論』においてかれは、「哲学」を真理の裁判長と描写しつつ、「耶蘇教」に対し「仏教」が哲理を持つ宗教であることを証明する¹⁸。當時、この書物は広く読まれ、かれが仏教のイデオローグとしての地位を固める契機となつた¹⁹。

また、もう一つの現実的な課題は、帝国大学との関係にあつた。當時、西洋哲学を正規課程として教育する唯一の機関であった帝国大学に対して、学生募集を意識していたかれは「世間一般」に目を向ける。「世ノ大学ノ課程ヲ経過スルノ余資ナキ者並ニ原書ニ通スルノ優暇ナキ者ノ為メニ哲学速歩ノ階梯ヲ設ケ」と、『哲学館』では貧乏で洋書が読めなくとも哲学を学ぶことができると繰り返して強く

調している。²⁰

このように井上円了は、哲学館を創立する時点から東本願寺に対する自分の位置と、私立学校の社会的地位に関して敏感に反応していた。そして、一八九〇年に始まつた一回目の全国巡回講演は、かれ自身が各記録の緒言において明らかにしているように、哲学館専門科設立の基金募集や人材募集をその目的とするものであった。²¹その後、一八九六年から一九〇二年まで続いた二回目の巡回講演活動の際には、「漢学専修科」と「仏教専修科」が開設され、「教育学部」「哲学部」の二体制を備えることになる。このように、全国巡回講演を通じて募金活動をした結果、哲学館は徐々に拡張され、一九〇三年には私立哲学館大学として認定されることになる。そして翌年、井上円了は第三回目の全国巡回講のプロジェクトを開始するが、そのほぼ最後の段階において朝鮮に訪れていていることを述べておきたい。

二、「哲学堂」建立と全国巡回講

「哲学堂」は、四人の哲学者を聖人とし、祭祀を行うこととで始まつたが、この点から、井上が哲学を「精神的的理想郷」として認識していたことが窺える。「哲学堂の由来」をみると、「哲学祭」は井上が東京大学を卒業した一八八五年にすでに始まつており、哲学館が設立された後の一八九一年から一八九五年まで行われ、一九〇四年には「哲学堂」がその祭祀の中心を占めることになつた。²²祭祀の対象となる四聖とは孔子と釈迦、ソクラテス、カントである。

三回目の全国巡回講において、重要なきっかけとなつた現実的課題は、「哲学堂」の設立である。とりわけ朝鮮巡回講の例をみると、一九一八年五月二六日の京城日報には「井上博士」の巡回講の目的が「哲学堂建立費に充てん」とする

ものであったことが書かれている。²³

「哲学堂」に関する最近の研究としては三浦節夫の研究が最も詳しいものであり、一九一五年に発行された『哲学堂ひとり案内』を増補編纂した『哲学堂』からは、哲学堂を通じて井上円了が実現しようとした思想について知ることができる。ところで、哲学堂の前史に当たる「哲学祭」に注目している研究は案外と少ないと言わざるをえない。ここでは、「哲学祭」において哲学がどのように形象化されていたのかに注目し、その実践としての哲学堂の意味を再検討したい。この問題は、後日の全国巡回講における現実的課題——国家主義的な活動——が、哲学堂の拡張事業とも深く関わつていたことを念頭に置けば、さらに重要な意味をもつであろう。

明治十八年十月二十七日初メテ其祭典ヲ試ミタリ其四

大家ヲ選定シタルハ決シテ私意ニ出ツルニアラス當時

哲学ヲ大別シテ東洋哲学西洋哲学ノ二類トナシ東洋哲

学ヲ支那哲学印度哲学ノ二種トナシ西洋哲学ヲ古代哲

学近世哲学ノ二種トナス而シテ此四種ノ哲学ハ其發達

ノ形式恰モ倒ニ懸ケタル扇面様ノ外見ヲ示シ其扇柄ノ

板要ニ当ルモノハ支那ニアリテ孔子、印度ニアリテ釈

尊、古代ニアリテ瑣克刺底氏、近世ニアリテ韓岡氏ナ

リ此四氏ハ皆哲学ノ中興ニシテ其以前ノ哲学ヲ統合シ

來リテ一大完全ノ組織ヲ開キ以テ後世ノ哲学ノ基礎ヲ

⁽²⁷⁾

置キタル者ナリ

このように、井上は東西の学者をそれぞれ一人ずつ選定した後、かれらの寿命を合算した三〇〇年を一年の三〇〇日とし、一〇月二七日を祭祀日として定める。実際の祭祀において朗読された文章には、かれが「哲学」という学問をどのような世界に喻えて理解していたのか、また、それを通じて何を求めていたのかがよく現れている。

四聖其人ヲ祭ルノ意ハ哲学其物ヲ祭ルニアルヲ知ルヘ

シ其哲学ハ一種ノ別世界ニシテ其中ニ天地アリ日月アリ風雨アリ山海アリ积迦ノ智ハ其所謂日月ナリ孔子ノ徳ハ其所謂雨露瑣克刺底ノ識ハ其所謂山岳ナリ韓岡ノ学ハ其所謂海洋ナリ其智ハ我ヲ照シ其徳ハ我ヲ潤シ其

識ハ我ヲ護シ其学ハ我ヲ擁シ我父トナリ我母トナリ君

主トナリ師友トナリ日夜我ヲ愛育撫養セリ是ヲ以テ不

肖円了等幸ニ哲学界ノ一人トナルヲ得タリ⁽²⁸⁾……

ここで、井上は四聖の思想を普遍的な自然物に喻えつつ、

また父母、君主などの倫理的関係に対応させる。自然と人

間の倫理的関係を同時に哲学の隠喻として用いることに

よつて、精神的的理想郷としての哲学が社会における倫理的

課題を担える具体的な学問であると描いている。もちろん、

井上が哲学祭を行ひ始めた頃には、まだ学制用語としても

「哲学」が分化されていなかつた状況もあり⁽²⁹⁾、かれの「哲

学其物」に関する表現も、決して流麗なものであるとは言

えない。だが、ここで「哲学」が、精神的文明をなす道具

として現れ、単なる理想郷ではなく、倫理的共同体に対する

「啓蒙」意識の発現として位置づけられているところに

注目してみよう。このような哲学像は、當時日本の啓蒙知

識人の目に「西洋」が「精神的」文明世界として映つてい

たことに対する、具体的な課題として要請されたものだと

理解できる。⁽³⁰⁾

以上のように、四人の学者を四聖として祭つた「哲学祭」は、一九〇四年、哲学館の大学公称を記念するためには建設された「哲学堂」の始まりとなる。井上は、最初は哲学堂の起源である「四聖堂」を、哲学館大学を引退した後

の隠居地として思うぐらいであつたが、以後哲学堂全体がかれの活動の中心に据えられるようになり、実際に引退した一九〇六年には、哲学堂を「精神修養的公園」^[31]にするという趣旨から、修身教会運動の中心地としていく。

曾て国民道德の大本たる教育勅語の御聖旨を普及徹底せしむるには、学校教育以外に社会教育、民間教育を各町村に起さざるべからずとは、余の年來の持論にして、学校退隱後は専ら其方に力を尽さんと思ひ、神経衰弱を医する民法は田舎の旅行にありと聞き、療養の旁ら日本全国の各郡各郷を周遊して、其趣旨を演述せんことに定めたが、開会の経費を支弁する方法を案出する必要が起つて来た。^[32]

すなわち、井上円了が一九〇三年に『修身教会設立趣旨』^[33]を全国的に配布することで始まつた修身教会運動は、かれの哲学館引退の時点と相まって哲学堂をその本拠地とするものであった。そして、全國の各地を巡講するために必要な資金は、實際において「哲学堂」の運営資金として集められることとなる。

四、井上円了の朝鮮巡講——長谷川総督との会話

それでは、晩年における井上の全国巡講、とりわけ、朝

鮮巡講を具体的に検討してみよう。一九一八年の朝鮮巡講に関する記録は『南船北馬集』一五編と一六編に収録されている。^[34]井上円了の朝鮮巡講に関しては、朴慶植による研究がある。^[35]朴は一九一八年の朝鮮巡講のみならず、朝鮮統監府時代であった一九〇六年の「満鮮旅行」から朝鮮巡講までの記録を分析している。とくに、日露戦争期から一九〇年代までの日本の対韓政策の変化を軸として、井上円了の朝鮮認識の摘出を試みており、当時における「日本政府の朝鮮殖民地政策」の代表的なイデオローグの一人として位置づける。ただ、前述したように、本稿は修身教育の展開とともに哲学堂拡張の一環として行われた「全国巡講」に焦点を当てているため、なかんずく併合後の「朝鮮巡講」に関する記録に注目して議論を展開していきたい。

井上は「朝鮮巡講第一回（西鮮及中鮮）日誌」の冒頭において、今回の巡講が「朝鮮總督府より十三道國民道德講話囑託の命」を受けたものであることを明らかにしている。^[36]

五月二十六日（日曜）晴雨不定、午前九時半京城南大門駅安着、京畿道長官松永武吉氏を始めとし、旧識數氏の歓迎あり、是より腕車に駕して朝鮮ホテルに入る、宿室は純朝鮮式の別館なり、直ちに朝鮮及満州雑誌社長秋尾春彷（旧哲学館出身）の案内にて長谷川総督及山縣政務総督を官邸に訪問す、午後一時東本願寺別院

に至り、愛國婦人会の依頼に応じて講話をなす、同会主事は大橋次郎氏なり、引続き高等女学校に於て公開講演をなす³⁸。

右の文章でわかるように、京城に着いた井上は直ちに哲学館出身の糸尾春芳³⁹とともに長谷川総督を訪問する。神田秘书官が、長谷川が前日まで「北鮮巡視」を終えて帰つたと伝えたため、二人はまず総督の疲労や巡視のことを尋ねる。糸尾の記録によると、長谷川は「是でもまだ戦争があれば何時でも飛び出す積りだからな」と冗談を交ぜながら「北鮮民の沈没なること、何れの地に行つても子供や青年は日本語を解すこと」などを語つたという。⁴⁰このように長谷川の北朝鮮巡視に関する会話が続いた後、井上円了は今回の朝鮮巡講の目的について次のように語つたという。

井上博士は国民道徳普及を思ひ立つた動機を語り、教育勅語は日本国民の精神の根底とすべきものなるに單に学校内に限られたる如き状態に在るを慨し之を国民一般に普及し、教育勅語の御精神を国民全般に徹底せしめん為め、三十九年以来日本全国を巡講し、四十余県に亘りたる旨を語られ、且つ日本今日の教育が兎角軽佻浮薄に流れ健全なる思想の涵養に欠ぐる所あるは國家将来の為め悲むべきことなど語られた。⁴¹

これに対する総督の答えは、

朝鮮の生徒が何れも日本語に熟達するのは感心であるが、其精神が果して日本化して行きつつあるのであるうか、又学校と家庭の聯絡が甘く取れて居るのであるうか……斯う云ふことに就て大に貴下の観察を願ひたいと云ふやうなことを博士に話された。⁴²

前の文章は、一九〇三年から始まつた「修身教会設立」という井上の晩年の活動を集約的に表していると同時に、一九〇八年に記された全国巡講の目的と一致するものでもある。⁴³ここで注目すべきなのは、井上自身が全國に修身教会を設立するために着手した「全国巡講」の趣旨の内容がある。ここで注目すべきなのは、井上自身が全國に修身教会を設立するために着手した「全国巡講」の趣旨の内容がある。この趣旨の内容が、一〇年後の朝鮮においてもそのまま繰り返されている点である。なお、上記の井上と長谷川の会話には大きなズレが存在している。このズレは、長谷川が述べている朝鮮の植民地的現実——もちろん、長谷川の認識そのものも、オリエンタリストのそれに他ならないが——というものに、井上円了がほぼ無関心であつたところから発生している。実際に井上が書いた「朝鮮巡講日誌」をみても、自分が移動した日時と場所、出会つた人びと、講演が開かれた地域とが詳細に記録されているのに對して、人びとに関する印象あるいは講演の聴衆側の反応などに關してはほとんど述べられていない。たとえば、

六月九日（日曜）晴、日中暑漸く強し、今朝日蝕皆既

なるも、臥床中にて見るを得ず、午前小学校に中学生及内地人に対して講演をなす、是より目下建設中なる大規模のドックを一覽す、当港は潮汐の干満の差甚しきを以て、水面の平均を保つ為に二重の水門を設く、即ちパナマ運河式なり、午時府尹楠野俊成氏の厚意により、其官宅にて午餐を喫し午後別院に於て婦人会の為に講演をなし尋で商業学校に於て鮮人に対し講演をなす。⁽⁴⁴⁾

ここで井上は、水門の風景を客観的に描写しているが、講演の内容や聴衆に関する印象などについてはあまり書いていない。部分的に「鮮人」に対して直接に声を出しているところもあるが、それはあくまでも「天皇と国民」という抽象的な関係に朝鮮人を代入する形で終わっている。たとえば、

孝は家庭和楽の本、忠は国家安全の基なれば、今日と雖も鮮人は此二道を遵奉せざるべからず、古來孝を移せば忠となるとの格言ある如く、君主は一国の親なり、父母は一家の主なれば、忠は孝の大なるもの、孝は忠の小なるものと心得べし。⁽⁴⁵⁾

教育勅語における「孝」と「忠」の倫理的再解釈が、井上の朝鮮巡講においてもそのまま反映されていることが窺える。このように、教育勅語の理念を基盤として「鮮人」と

の関係を構築する當為は、朝鮮に関する井上の認識を、「修身教会を拡張する」といった本来の目的とは異なる次元に向かわせる結果を招く。言いかえれば、「修身教会」の拡張というのは、朝鮮巡講において絶えず強調された「國民道德拡張」の言説に裏づけられていたのであり、ここで井上における「哲学」と「國家主義」の一断面を垣間見ることができるだろう。したがって朝鮮巡講も、いわば帝国日本の恩徳を抽象的に確認する旅路になってしまったのだ。ちなみに、このような井上の認識が、全国巡講の開始、そして「哲學館」と「哲學堂」の設立の段階からすでに準備されていたことを忘れてはならない。

井上は、朝鮮の道路や自動車、水道、学校教育などが「不便なく」⁽⁴⁶⁾あることを「皆朝鮮併合の余沢」にあざかつた結果だと述べ、併合前には「山野に植林すれば、其樹を微發せられたる由、故を以て人民は所謂其日ぐらしを以て足りりとし」だが、「併合以來悪政は善政と一変し、人民始めて其堵に安んずるを得た」という。⁽⁴⁷⁾そして、最後に「朝鮮人たるもの永く其恵沢を忘れざらんことを望む」と述べ、朝鮮巡講の記録を終えている。⁽⁴⁸⁾

五、「朝鮮巡講」における講演の内容

井上は京城に着いた五月二六日に二回の講演を行つた。東本願寺と京城高等女子学校で開かれた講演の主催は、それぞれ愛國婦人会と朝鮮教育研究会・朝鮮及満州社と京城日報であった。⁵⁰一方、京城日報側は五月二六日の新聞報道で「井上博士講演会」の開催を知らせている。そして、その翌日の新聞の上段に講演の内容が掲載された。

朝鮮教育研究会・朝鮮及満州社及本社の主催に係る文
学博士井上円了氏の講演会は二十六日午後三時から京
城高等女学校講堂に於て催された▲定刻前から満堪立
錐の余地もなく尚聽講者陸続として絶えなかつた為め
会場の混雑を慮かつて定刻より約三十分遅れて開会井
上博士遂行の来島好問氏先づ国民道德普及会の趣旨を
述べ次に主催者側を代表しての糸尾旭邦氏の挨拶あり
四時急救の如々拍手に追へられて井上博士は演説上の
人となつた最初の演題は「国民道德の大綱」と言⁵¹その
その要旨は天地冥々の間に一種不可思議なる玄妙の氣、
即ち正氣なる者がある▲我国に於ては此の浩然たる正
氣が国体の上に顯現して思道となつた、之れ東洋にあ
つて唯一の東洋文明の相続者たり全世界に向つては新

興國たり、其皇統一系の国体は世界に冠絶しつつある
所以である……と■声一番し教育勅語は實に国民道德
の淵源であり、戊申詔書は国体充実の上に於て国民斎
丁及び支那等に於ける愛國心の欠陥に例を取り▲我国
の美点を挙げ大いに国民道德の鼓吹に努めたるが聽衆
肅として水を打つ様であつた。

これは二六日に京城女高において開かれた講演の内容である。「國民道德普及の趣旨」や「教育勅語」の重要性を主張しており、東洋文明の率先者としての日本の役割を強調している。上述したように、このような「國民道德拡張」に関するかれの意志は、修身教会と哲学堂の設立とともに具体化されていた。要するに、かれが四聖祭を通じて倫理的宇宙觀を「哲学」概念に反映したことは、晩年ににおける全国巡講活動を支えていた論理にもなつていったのだ。
井上円了が「哲学」に抱えていた文明への予感と信頼は、かれの自己認識の下敷きとなり、個人的な諸活動——これを國家の事業にまで結びつくのがかれの目標であつた——を推進していく上で原動力にもなつた。西洋文明に対しても自己認識は、三回にわたつて行つた「歐米視察」より具体的に形成されていた。⁵²

これをもつて西洋各国、みなその国固有の學問を愛重

し芸術を保護し、別して言語、宗教のごときは、つとめてその国固有のものを保存せんとす。これをもって、フランスにはその諸学術みなフランス独立の風を存し、英國にては英國独立の風を存し、ドイツはドイツ、ロシアはロシア、おののおのその国独立の風あり。西洋の強国にしてなおかくのごとく。いわんやわが國のごとき、その富といいその力といい、ともに西洋諸国にしかざるものにおいてをや。その国固有の諸学諸術を保存してその国独立の氣風を養成すること、最も今日の急務といわざるべからず。⁵³

これは、一八八九年に刊行された欧米日記の一部である。この第一回目の欧米視察の経験は、哲学館を設立した直後、「哲学館改良ノ目的ニ関シテ意見」に反映された。一八八九年の哲学館改良の目的は、欧米の「各國皆其國從來ノ學問」を「保護シ……之ヲ振起」するに対する自覺として、「日本國固有ノ學術宗教……ヲ論究」し「一國獨立」を図るものであった。この第一回目の欧米視察は、その後、明治後期になると、日露戦争の雰囲気の中で具体化された「修身教會設立趣旨」にも反映され、全国巡講の表面的な目的となり、朝鮮巡講における言説として拡張していく。

近年わが国民の知識日に勃興し、道徳月に廃頽し、智徳の並進行せざる傾向あるは、あに奇妙なる一現象に

あらずや。その原因もとより一ならずといえども、要するに学校以外に修身道徳を授くる所なきによる。これに反して西洋諸国は学校以外に日曜教会ありて、毎週精神の修養をなさしむ。おもうに、かの国において人民の知識とともに道義また進み、なかなか社会道德、実業道德の大いに発達せるは、全くこの教会の効果なりというと過言にあらざるべし。果たしてしからば、わが国においても今より各町村寺院もしくは適宜の場所において修身の教会を設け、国民道徳のおおもとたる教育勅語の聖旨を開達敷衍して、小学卒業以上のものを教誨し、もつて町村の人民をしてことごとく道徳の修習をなさしむるは、實に目下の急務なりとす。戦後の経営も、けだしこれより先なるはなし。風俗改良、公徳養成の方法もまた、これ外にあるべからず。これ、余が学校教育の補習として修身教会を設置するの必要を唱うるゆえんなり。⁵⁴

つまり、本節の冒頭で取り上げた朝鮮巡講の内容においてかれが主張する「教育勅語による国民道徳涵養」というものは、「朝鮮」という地域のみに特化された内容ではなく、第一回目の欧米視察以来やそれを反映した哲学館改良の事業、そして日露戦争を経て徐々に発展された論理であつて、とりもなおさず、晩年において出来上がつたもの

でもあつた。

歴史の跡を辿りて世界文明の状態変遷推移等を研究する時は印度の哲学支那の文教制度等所謂形而上の文明は東洋に創まり東洋の文明は西洋の文明より遙に先きに花を開いたのである。然るに現状は果して如何であるか。西洋の文明は今将に満開の時代となつて百花繚乱妍を競ひ華を誇つて居るのに一方東洋の各国は殆ど滅亡の状態に陥つて居るではないか、従つて東洋の文明は頽廃瀕死の状態に陥つて居る、此間に屹立して西洋の文華と美を競ひつゝあるものは独り我が帝国あるのみである。⁵⁶

この文章は、同じく京城女高で行われた講演で『朝鮮及滿州』に掲載されたものである。「記者筆記」となつているが、だれが記録したのかは知るすべがない。ここには、先に引用した「東洋文明の相続者」という内容の具体的な文脈、すなわち、東洋文明が西洋文明より前に成立したとの根拠や、「我が帝国」が東洋文明を率先しなければならない理由が記されている。

日露戦争後、新たな中心軸として登場したイギリスとドイツの競争的な帝国拡張をすでに経験した井上が、その現実に対応する思想として挙げたのは「忠と孝の一一致」であった。「朝鮮巡講」記録からも確認したように、かれは

「我が國体」の原動力を「忠」と「孝」から探し、天皇と「日本国民」の関係を「孝」の倫理と一体化することで国民道徳の可能性を求めている。「忠とは所謂大義名分の事である。日本の忠なるもの、精神の中には何等不純なる利己心の分子は含まれては要らぬ……日本人の考と云ふのも此忠と云ふ心の変形であつて日本人の忠と考とは一致すべきものである」とし、⁵⁷「忠考」の倫理を「万世一系の大和魂」として規定する。

その反面、「西洋」については批判を行う。「西洋人の思想は極端に利己的である。この利己的心情が発達し向上して仁義博愛と云ふやうにもなつて来るが、彼等の道徳的行为は其根本思想を利己に発して居る」と批判しつつ、イギリスとドイツの戦争について次のように語る。

今日の歐洲戦争の原因は彼等の利己心の發動と見ることが出来る。英国人は旺に独逸の蛮行を非難攻撃して止まないが、独逸人は又英國の横暴非行を擧げて元來英國が今日の強大なる領土と勢力とを有するに至つたのは有らゆる横暴非道を働いて他国を侵略し他民族を征伐したのでは無いか、彼等は何の辞を以て今は吾々の取る行動を彼れ此れ云ふ資格があるかと云ふて盛に非人道極まる暴行を働いて居る、我輩は独逸の言分が正しいか英國の対独非難が正しいかは此處には言はな

いが、要するに西洋には一般に利己主義の思想が旺盛

であると云ふことだけは断言して置く。⁽⁵⁹⁾

つまり、かれにとって精神的文明の鏡であつた「西洋」は、もはや日露戦争以来、競争関係として認識されていき始めたのである。ただし、西洋の利己心を克服する倫理として「孝」概念を抜けた「忠」という徳目を挙げ、国民道德の重要性を主張することには如何なる変わりもない。

六、おわりに

以上、本稿では、井上円了の「朝鮮巡講」に関する史料を取り上げ、かれの哲学に対する認識と国家主義的活動の関連性について考察した。

かれの朝鮮巡講は、朝鮮を通して帝国日本のアイデンティティを確認することに集中されている。朝鮮で行われた講演は、西洋文明に対する自己認識として、帝国日本の拡張と国民道徳の樹立を訴えるものであった。このような帝国主義的なイデオロギーは、哲学堂拡張などにおける下敷きとなっていたが、その意味で「哲学」に関する井上の議論は、国家主義と植民地主義と合致していたといえる。つまり、われわれは、井上円了を通して、帝国主義や国家主義を支えた近代的「哲学」概念の様子を発見することが

できるかも知れない。

井上円了は最後の論説「哲学上に於ける余の使命」において次のように述べている。

第一の使命たる哲学を通俗化することは余が前半生の事業にして、其間の著書と教育が正しく之に當つて居る、而して其中心は哲学館である、その創設の主旨は哲学を世間に普及するにありて、最初は飽まで通俗本位なりしも、時の勢に誘はれ風潮に動かされ、自然に高尚に傾くやうになりて、遂に大学専門科までを開設するやうになつて來た……第二の使命たる哲学を実行化することは、老後半生の事業にして、明治三十九年退隱以後之に取扱り、其中心は和田山哲学堂と定めて居る、西洋の哲学は理論一方に偏して実行方面を疎外せる有様であるが、是れ哲学の目ありて足なき不具者にしてイザリ哲学たるを免れぬ、然るに余は哲学の極致は実行にありと信じ……哲学の定義を下して奮闘活動の学とし、之を実行上に実現せんことに専ら工夫を凝らして居る。⁽⁶⁰⁾

かれが実現しようとした哲学は、このように「奮闘活動」する学であつた。哲学館設立から修身教会運動まで、東京から朝鮮そして満州まで、かれは生涯において實に「奮闘活動」したのだ。しかし、われわれは、その「奮闘活動」

とは別に、かれの発話が立っている場所を問わなければならぬことを指摘することで、本稿を終えたい。

注

- (1) 許智香「메이지 일본에 있어서 「철학」 개념의 역사적 위치 (明治日本における「哲学」概念の歴史的位置)」、『人文学志』第四四集、忠北大学校人文学研究所、二〇一一年六月、二四〇—二五〇頁。
- (2) 桂島宣弘「東アジアの近代と翻訳」、「自他認識の思想史」有志舎、二〇〇八年、一四八—一五〇頁。
- (3) 代表的なものとして、田中菊次郎「円了と民衆」、『井上円了研究』第一冊、東洋大学井上円了研究会第三部会、一九八一年。
- (4) 近代日本思想史研究会『近代日本思想史』第一卷、青木書店、一九五六年、二二三—二二八頁。
- (5) 『京城日報』一九一八年五月二六日、二〇七頁（韓国教育史文献研究院発行影印本、第一七卷、二〇〇三年）。
- (6) 舟山信一『舟山信一著作集第六卷 明治思想史研究』こぶし書房、一九九九年、三〇頁。
- (7) 井上哲次郎『明治哲学界の回顧』岩波書店、一九三一年、六七—六八頁。
- (8) 清原貞雄『明治時代思想史』（大鎧閣、一九二一年、一二六—一三四頁）、近代日本思想史研究会『近代日本思想史』第一卷（青木書店、一九五六六年、二〇四—二一八頁）、宮川透・荒川幾男『日本近代哲学史』（有斐閣、一九七六年、五六頁）、針生清人「井上円了の哲学」（『井上円了研究』第一冊、一九八一年、八二頁）、船山信一『船山信一著作集第六卷 明治思想史研究』（前掲、一〇六—一三〇頁）。
- (9) 著しい例として、明治三年の「哲学館目的ニツイテ」において井上円了は、哲学教育の目的を「宇宙主義」と規定し、それは自国の言語や歴史、宗教を教える「日本主義」と一つであると主張する（井上円了「哲学館目的ニツイテ」、『東洋大学百年史 資料編一上』東洋大学創立百年史編纂委員会、一九九三年、一〇五頁）。
- (10) 飯島宗享は、井上円了の「民」中心の「啓蒙主義」が、当時の「天皇制、家族主義、儒教倫理、富国強兵策などに關して……きわめて積極的」であったことを指摘する（飯島宗享「井上円了の「教育」理念序説」、『井上円了の思想と行動』東洋大学、一九八七年、一〇—一一頁）。また、大久保利謙は、井上円了の「政教社」活動に關して、かれらの「日本主義は……文化開化を国民文化のうちに再編成しようとする」ものとして、反歐米主義の保守派とは明確に一線を画していると指摘する（大久保利謙『明治維新の人物像』吉川弘文館、二〇〇七年、四二七—四三〇頁）。
- (11) 三浦節夫は井上の全国巡講を前期と後期に分けている

- が、ここでは後期の「全国巡講」、つまり、一九〇六年（一九一九年）の巡講に当たる。その時期は、井上円了が哲学館大学を引退した後、「修身教會運動の展開」という新たなテーマをもつて全国への巡回に再出発した時期として位置づけられる（三浦節夫「井上円了の全国巡講」、『井上円了選集』第一五巻、東洋大学、一九九七年、四七〇頁）。
- （12）井上円了の全国巡回講演の全貌に関しては、三浦前掲「井上円了の全国巡講」を参照。
- （13）なお、井上円了は一九〇六年にも朝鮮を訪れたことがあるが、その際の記録が「朝鮮旅行談」「満鮮紀行」などに乗せられている。当時の朝鮮旅行については、紙面上深入りすることができず、ただ本文でも言及している朴慶植の研究（「井上円了の朝鮮巡講の歴史的背景」、「井上円了研究」第七巻、東洋大学井上円了記念学術センター、一九九七年）を紹介しておきたい。
- （14）『哲学会雑誌』一八八七年、見返し。
- （15）井上円了「哲學ノ必要ヲ論シテ本会ノ沿革ニ及ブ」、『哲学会雑誌』第一冊、哲學書院、一八八八年、八頁。
- （16）井上円了「哲學館開設趣旨」〔明治二〇年六月〕、前掲『東洋大学百年史 資料編一 上』八三頁。
- （17）三浦節夫「哲學館創立の原点」、「井上円了センター年報」第一九巻、東洋大学井上円了記念学術センター編、二〇一〇年、一六頁。
- （18）井上円了『仏教活論序論』哲学書院、一八八七年（『井上円了選集』三巻、東洋大学、三三四～三五四頁）。
- （19）三輪政一編『井上円了先生』大空社、一九九三年、二頁。
- （20）井上前掲「哲學館開設趣旨」〔明治二〇年六月〕八三頁。
- （21）井上円了『館主巡回日記』『井上円了選集』第二二巻、東洋大学、一九九七年。
- （22）前掲『京城日報』一九一八年五月二六日、二〇七頁。
- （23）三浦節夫「井上円了と哲學堂公園一〇〇年」、『井上円了セントリー年報』第一一巻、東洋大学。
- （24）石川義昌編『哲學堂』財団法人哲學堂事務所、一九四一年。
- （25）同右、二〇頁。井上円了「哲學上に於ける余の使命」、「東洋哲学」第一二六篇第三号、東洋大学発行所、一九一九年、三頁。
- （26）井上円了『南船北馬集 第三編』、前掲『井上円了選集』第二二巻、五五〇頁。
- （27）前掲『東洋大学百年史 資料編一 上』一六頁。
- （28）同右、一八頁。
- （29）井上円了が東京大学に入学した一八八一年は、哲学科が始めて独立した年であった。その細部科目としては、哲学史、近世哲学、印度及支那哲学が設置されており、その他に心理学、世態学、道義学、審美學があつた（東京帝国大学『東京帝国大学五十年史』一九三二年、六九八～六九九）。

九頁)。

(30) この点は日本において「哲学」という翻訳語を作り上げたと知られている西周(一八二九—一八九七)においても明らかである。西周が『百一新論』において哲学を翻訳する過程には、当時の社会的課題に対応する方式が表れている。かれは、君臣・夫婦・親子などの人間関係を正す

「文明の治」として、「哲学」と「権義」をあげている(大久保利謙『西周全集』第一巻、宗高書房、一九八一年、二六五)二七三頁)。

(31) 石川編前掲『哲学堂』一九〇—二〇頁。

(32) 同右、二〇頁。

(33) 一九〇三(明治三六)年に配布された『修身教会設立趣旨』は、全二十頁ほどの薄い帳面形として携帯しやすくなっている。その内容は、井上が『哲学堂』において国民道徳教育の必要性を述べた部分とさほど異なるものではない(井上円了『修身教会設立趣旨』哲學館、一九〇三年)。

(34) しかし、『井上円了選集』の『南船北馬集 第十五編』には、「朝鮮巡講」の部分だけが抜けている。井上円了記念学術センターによると、「日本編」として「国内巡講」のみを集めて編集したのがその理由であるという。また、『南船北馬集 第十六編』は『井上円了研究』第三巻(東洋大学井上円了研究会第三部会、一九八五年)に「非公開資料」として収録されている。

(35) 朴慶植「井上円了の朝鮮巡講の歴史的背景」、『井上円了研究』第七巻、東洋大学井上円了記念学術センター、一九九七年。

(36) 同右、一〇五頁。

(37) 井上円了『南船北馬集・第十五編』国民道德普及会、衆時論社出版、一九三六年)を参照すること。また、糸尾は哲学館出身であり、井上円了とも関わりをもつていた。

(38) 同右、一〇三—一〇四頁。

(39) 糸尾春芳に関しては、『朝鮮人物選集』(阿部薫著、民衆時論社出版、一九三六年)を参照すること。また、糸尾は哲学館卒業した(一八九七年)後、京都の新聞事業に勤めたが、井上円了の勧誘で朝鮮にわたることになる(一九〇〇年)。朝鮮においては釜山の『開成学校』に勤めた。当時、開成学校の校長は荒浪平次郎で同じ哲学館出身であった。また、東本願寺が釜山に創立した日本語学校『草築学院』が閉校した後、その学生たちを開成学校に送っていたことからも、糸尾が朝鮮に定着するには哲学館と井上円了の影響が大きかったことがわかる(崔惠珠「한 말 일제 하 샤쿠오 (糸尾旭邦) 의 내한 활동과 조선인식 (韓末日帝下における糸尾旭邦の来韓活動と朝鮮認識)」、『韓国民族運動史研究』韓国民族運動史学会、一九〇〇五年)。

(40) 糸尾春芳「井上博士を伴ふて長谷川總督を訪ぶ」、『朝鮮及滿州』第一七巻第一三三号、六頁。

(41) 同右。

(42) 同右。

(43) 『南船北馬集 第一編』には、修身教会の設立とともに全国巡回講演を行う理由に關して次のように記されている。「近年わが国民の知識日に勃興し、道徳月に廢頽し、智徳の並進行せざる傾向あるは、あに奇妙なる一現象にあらずや。その原因もとより一ならずといえども、要するに学校以外に修身道徳を授くる所なきによる。……わが国においても今より各町村寺院もしくは適宜の場所において修身の教会を設け、もつて町村の人民をしてこと」とく道徳の修習をなさしむるは、實に目下的の急務なりとす」(井上円了

『南船北馬集 第一編』、前掲『井上円了選集』第一二卷、一九〇〇—一九一頁)。

(44) 井上前掲『南船北馬集 第十五編』一一三頁。

(45) 井上円了『南船北馬集 第十六編』一九一八年、一八

頁(『井上円了研究』第三卷、東洋大学井上円了研究会第

三部会、一九八五年)。

(46) 改めて『修身教会設立趣旨』を記しておく。「余は今

を距ること十七年前、哲學館を創立せしより、學館拡張の

為、前後二回日本全國を巡遊し、他方の宗教の振はざるを

見、徳義の衰ふるを察し、不肖ながら國家將來の為に聊か

憂慮する所ありき、尔来之を輓回せんと欲し、百万工夫の

結果、格地方に於て修身教会を設置する方法を案出し、之

れを東西両洋の事情に對照するに、今日の急務是より甚しきはなしと自ら信するに至る……」(井上円了『修身教会設立趣旨』哲学館、一九〇三年)。

(47) 井上前掲『南船北馬集 第十六編』一八頁。

(48) 同右、二二頁。

(49) 同右。

(50) 井上前掲『南船北馬集 第十五編』一〇四頁。

(51) 前掲『京城日報』一九一八年五月二七日、一二五頁。

(52) 井上円了の「歐米視察」に關しては『井上円了選集』第三卷(東洋大学、二〇〇三年)を參照。

(53) 井上円了『歐米各國政教日記(下編)』、『井上円了選集』第二三卷、東洋大学、一四五—一四六頁。

(54) 前掲『東洋大学百年史 資料編一上』一〇一頁。

(55) 井上前掲『南船北馬集 第一編』一九〇〇—一九一頁。

(56) 井上円了『國民道德の大綱』、『朝鮮及滿州』第一七卷

第一三三号、五八頁。

(57) 同右、五九頁。

(58) 同右。

(59) 同右。

(60) 井上前掲『哲學上に於ける余の使命』、『東洋哲學』第一六篇第三号、二二二頁。